The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	構造字彙論
Author(s)	伊藤, 雅光
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49424
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【66】

氏　　名	伊　藤　雅　光（いとう　まさみつ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２３２４０　号
学位授与年月日	平成21年３月24日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	**構造字彙論**
論文審査委員	（主査） 教　授　金水　　敏 （副査） 教　授　蜂矢　真郷　　准教授　岡島　昭浩

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、文献学によって得られた知見を言語科学の観点から構成するための理論として、「構造字彙論」および「構造語彙論」を提唱、その理論的背景、詳細と、適用例を示すことを目的としている。

序章「本論の目的と構成」に続き、第Ⅰ部「先行研究編―本論の目的と構成」には第１章「構造意味論の展開」（第１節「意味とは何か」第２節「構造意味論」第３節「指摘構造意味論」）、第２章「構造字彙論の源流」（第１節「ソシュールの共時態と通時態」第２節「コセリウの構造意味論」第３節「服部と国広の意義素論」）が含まれる。

第Ⅱ部「理論編―構造語彙論と構造字彙論」には、第３章「構造意味論から構造語彙論

へ」（第 1 節「構造語彙論」第 2 節「構造語彙史論」）、第 4 章「量的構造語彙論」（第 1 節「計量語彙論」第 2 節「量的語彙構造史論」）、第 5 章「構造字彙論」（第 1 節「構造字彙論とは何か」第 2 節「字彙構造史論」第 3 節「量的構造字彙論」第 4 節「量的字彙構造史論」第 5 節「中国テクストとしての『日本書紀』における漢字彙素の構造」）が含まれる。

第Ⅲ部「分析編―字彙・語彙構造モデルの構築」には、第 6 章「【量的構造通時態モデルと質的超時態モデルの構築】『日本書紀』における語彙・字彙比較構造史モデル」、第 7 章「【量的字彙構造の解明】『古事記』における音仮名列の長さと最小労力の法則」、第 8 章「【語彙の量的超時態モデルの構築】語彙の量的構造史モデル」が含まれる。最後に第 9 章「結論」がおかれる。さらに、「参考文献」、「初出一覧」を付する。A4 判横書きで 215 頁、400 字詰め原稿用紙に換算して約 770 枚に相当する。

第Ⅰ部は「先行研究編」にあたり、主にヨーロッパにおける構造意味論の研究の流れを 20 世紀初頭から概説している。特にドイツ意味論学派、ソシュール、コセリウ等を重視し、それらの学説を構造字彙論にどのように取り込んだかを論じている。第Ⅱ部は「理論編」にあたり、著者が提唱する「構造語彙論」と「構造字彙論」とを論じている。具体的には、「構造語彙論」「構造語彙史論」「計量語彙論」「量的字彙構造史論」等の分野や基本的概念について論じ、それをもとに「構造字彙論」「字彙構造史論」「量的構造字彙論」「量的字彙構造史論」等の分野や基礎的概念を説明している。第Ⅲ部は「分析編」にあたり、「字彙・語彙構造モデルの構築」に関する三つの記述的論考から考察される。第 6 章では『日本書紀』の現漢文と和訓に見られる〈死ぬ〉という意味をもつ、漢語と和語の動詞語彙と動詞字彙とを対象にした分析を行っている。第 7 章では『古事記』における音仮名列の長さの度数分布がジップの「最小労力の法則」に従う構造を持つことを示している。第 8 章では古典 13 作品を資料にして、上代から中世までの語彙の量的構造史モデルを示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、従来、事実の集積に終わりがちであった語彙史研究に理論的道筋を与え、また「構造字彙史」という新たな理論構築に切り込んだ点で大きく評価できる。特に、日本ではあまり注目されてこなかったヨーロッパ系の語彙理論、特にコセリウのそれを詳しく読み解き、応用の道を開いた点が重要である。共時論と通時論を峻別するというソシュール的な構造論を越え、言語構造を絶えざる体系化の過程と捉えることによって共時論・通時論を止揚するというコセリウ流の言語史観が的確に評価されている。

この理論的視点を具体化すべく、ケーススタディとして取り上げられた『日本書紀』の〈死ぬ〉意味を表す漢語、和訓の分析、『古事記』の音仮名列の度数分布の分析等は、筆者の狙いがよく表されていて、目覚ましいものがある。『日本書紀』の例では、多数の訓点資料から用例を丹念に拾い出し、原文の扱っている時代と加点時期によって手際よく整理して見せた点で、理論の切れ味がよく示された。

また、計量的研究においても新見が示されている。ことに、ジップの最小労力の法則が言語の枠を越えて効力を発揮する点を明確に示した点は評価に値する。

しかしながら、次のような疑問点もある。『日本書紀』の例は、法令に依拠することができた希有な例であり、狙いはよいが、他のケースで同様な手法がいつも使えるかどうかには疑問が残る。例えば漢文訓読資料を用いるならば、音訓の確定しない、あるいは音訓が揺れる例、複数の音訓加点のある場合など、「字彙」の理論として真価が試されるケースが他に多数あるだろう。また、第 8 章は『古典対照語い表』（フロッピー版）のデータを用いたケーススタディであるが、操作が若干恣意的に見え、また結論がどこに向かうのかが見えにくい。総体として、理論の説明に比して実例による検証が弱い印象を与える。

とはいえ、これらの問題点は、本論文によって示された道筋の延長上にある課題であり、むしろこのような問題点を可視化した点にこそ本論文の本領があると言えるであろう。

なお、平成 21 年 1 月 13 日に本論文の口頭試問を行い、同時に学力確認を終えた。この点もふまえ、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。